

令和7年度実績報告書

○補助事業の目的・必要性

●総論

九州大学の理念等に基づき、我が国の医学・医療の多彩な分野において指導的な役割を果たし、アジアをはじめ広く世界で活躍する医師・医学研究のリーダーの養成を積極的に推進する。

その機能強化につなげるため、本事業における臨床研究面では、若手研究者による横断的な組織を設立し、診療科の枠を超えた交流を促進し、革新的なアイデアの創出を目指す。

また、優秀な臨床研究支援人材を登用し、持続可能な体制となる改革を行う。

次に、教育面では、診療参加型臨床実習充実のため、医行為経験が円滑に進む体制の整備および医学教育学上効果が確立している Near Peer Learning を卒前卒後シームレスに導入し、また医行為同意書取得の簡素化などの実現を目指しながらも、教員の負担軽減も可能にするモデル組織の構築実現を目指す。

●具体的な事業内容

- ① 多くの患者のデータを収集・分析し、治療が本当に役立っているのか、効果を発揮しているのかなど、より実態に即した治療となっているかの検証のため、全国の主だった病院と多施設共同でリアルワールドエビデンスの創出を目指す。
- ② 患者さんや治験協力者を今後増加していくために、負担が少なくコスト抑制も期待できる分散型臨床試験（DCT）の実装による医師主導治験の推進。
- ③ 臨床研究の国際展開を推進するため、マレーシアやインドネシアの治験機関と提携し、国際共同臨床研究のためのネットワーク構築や薬事規制研究を推進する。
また、マレーシアやインドネシアのアカデミアと連携し、現地で特にニーズの高い感染症やがんに関する国際共同研究を進め、本学がアジア諸国で実施する観察研究を含めた臨床試験を支援する他、現地ニーズに見合う医薬品、医療機器シーズを育成し国際展開に繋げる。
- ④ 生成 AI によるプロトコル作成支援、論文作成支援の利活用に向けた研究を推進するなど、ICT や DX の活用によって研究支援業務を効率化し、臨床研究の活性化を目指す。
- ⑤ 本学は、橋渡し研究推進拠点としての機能も担っており、グラント支援事業、企業連携イベントの企画や参加等、各種マッチング支援を通じて企業等や他分野との共同研究を推進してきたが、個々の活動を充実させることで共同研究推進を図る。

- ⑥ 基礎研究の実績を活用した臨床研究（橋渡し研究）の活性化のため、診療科の枠を超えた協働と交流を促進し、革新的なアイデアの創出を目指す。
- ⑦ 教員負担の軽減のため、卒前卒後のシームレスな屋根瓦教育体制を構築する。
具体的には専攻医、研修医、医学生を対象とした教育スキルトレーニングオンラインプログラム（ニアピアラーニングプログラム：NPL-プログラム）を実施する。
- ⑧ 教員の大きな負担となっている患者への同意書取得業務について、DX化を進め、教員の負担軽減を図る。
- ⑨ 医学生の臨床実習記録の電子化、可視化のため、臨床実習記録システムを導入し、学修内容を簡便に電子上に蓄積し自己の学修到達度が確認できるシステムを構築する。
この取り組みは教員による評価の簡素化にもつながる。
- ⑩ 現場でのより安全な医行為の実施を目的として、侵襲性の高い手技を中心に、シミュレータを活用し、必要な医行為の充実を図る。
- ⑪ コモンな疾患の経験不足の改善や医行為の経験率の向上のため、地域医療実習を充実させる。
臨床実習コーディネーターを配置することで、医学生がコモンな疾患を十分経験し、臨床能力を着実に身につけさせるための実習協力施設をさらに増やし、地域における医学生の診療参加型臨床実習の充実及び教員の負担軽減の両立を実現させる。
- ⑫ 教育に積極的に取り組む教員への評価を充実するため、教員の教育実績を可視化し、業績評価として活用できるよう、臨床実習指導医認定制度の構築を行う。
また、日本版臨床指導医評価表（Japanese Clinical Teacher Evaluation Sheet : JaCTES）を用いた他者評価も活用する。
- ⑬ 医師の働き方改革への対応として、多職種連携によるタスク・シフト／シェアの推進及び ICT や医療 DX の活用による業務の効率化等を推進することで、医師の教育研究時間を確保する。
さらに、男女にかかわらず育児・介護等の為に離職することなく十分に自身の能力を発揮し、キャリアを継続できる働きやすい環境を作ることに取り組む。

○補助事業の実績

●事業実績の概要

本事業では、交付申請時の計画に基づき、臨床研究体制の強化と医学教育の充実に向けた取組を着実に実施した。

臨床研究面では、診療科横断的な会議体の運用や当院の臨床研究支援組織である ARO 次世代医療センター（以下「ARO」という。）（*1）を中心とした ICT・医療 DX の導入により、研究支援体制および研究効率の向上を図った。

また、DCT の実施や医師主導治験支援を通じ、学内外における臨床研究支援機能の強化を進めた。

教育面では、ニアピアラーニングプログラムの提供、CC-EPOC（卒前臨床実習生用オンライン臨床教育評価システム）（*2）のカスタマイズ準備、医行為実施の充実に向けた取組を行い、卒前・卒後教育の質向上を図った。

さらに、地域診療参加型臨床実習の運用開始や FD の実施により、地域医療教育体制の整備を進めた。

●本年度の補助事業実施計画と具体的成果

① 診療科の枠を超えた交流促進のための臨床研究メンターとともに、組織メンバーの追加を募る。

今年度若手医師のグループによる教育を推進するための会を最低 1 回開催する。

トライアルマネージャー会議にて、各診療科の中堅の「臨床研究管理医師」を配置し、2 ヶ月に 1 回の会議において「臨床研究の豆知識」コーナーを設け、活発なディスカッションを行った。

② 臨床研究を効率化する ICT 等を ARO にて運用し、課題を抽出する。

臨床研究を効率化する ICT 等を ARO にて運用し、課題を抽出した。

特に、機械学習を可能とするためのグラフィックボードを強化し、高度なデータ解析環境を整備した。

また、REDCap のデータを直接参照可能な Business Intelligence ツール（モーションボード）を導入し、研究者が効率的に臨床研究データを分析・提示できる環境を構築した。

これにより、研究の質とスピードの向上に寄与した。

③ 臨床研究支援者のキャリアパス設計に向けた協議を継続し、課題整理を行う。

ARO が導入している人事評価を活用したキャリアパス設計及び無期雇用を含めた協議を継続するとともに、課題抽出を行った。

④ 臨床研究支援職として教員および臨床研究専門職員等の配置による研究支援体制の整備について継続検討。

支援人材の専門性向上と定着を促すための具体的な方策について検討を進めた。

⑤ DCT（分散型臨床試験）の実施。

倫理指針下の介入研究を DCT として実施した。

また、ARO が支援して、佐賀大学の医師主導治験を実施した。

宮崎大学の医師主導治験に関しても、ARO が支援して、次年度の実施の AMED 資金を獲得した。

⑥ 研修医、専攻医に NPL-プログラム提供開始。

医学教育学、臨床教育研修センターと共同で 2024 年度から専攻医、研修医を対象とした教育スキル

トレーニングオンラインプログラム（ニアピラーニングプログラム：NPL-プログラム）の準備を行い、2025年度初旬に完成させた。

2025年度には研修医・内科専攻医を対象にプログラムを提供し、高い評価を得た（履修者研修医24名、専攻医41名）。

将来的には九大モデルを全国に還元することを念頭に学外の協力者にも参画いただいて準備を進めている。

⑦ 同意書取得のDX化としてアプリを導入（パイロット）。

定期的に電子カルテ管理部門（メディカルインフォメーションセンター）と準備の打ち合わせを行い、富士通とも共同で現在アプリを開発中である。

また病院関係部署とも協議し、円滑な導入に向けて議論・検討を重ねている。

⑧ CC-EPOC 九大カスタマイズ。

医学生の臨床実習記録の電子化・可視化のため、臨床実習記録システムを導入する準備を進めている。

九大によりマッチしたプラットフォームの選定を行い、Moodle(*3)による運用が最も効率的と判断し、アドインの修正を実施している。

併せて事務作業を滞りなく推進するため、事務職員の雇用と、作業を円滑に進めるための環境整備を行った。

⑨ 数診療科でCC-EPOC部分導入（パイロット）。

現在、Moodleのアドインを開発中であり、でき次第パイロットを開始する。

⑩ 地域における医学生の診療参加型臨床実習の運用開始。

地域医療充実に向けた実習コーディネーターを2025年度から雇用した他、事務体制強化を行った。

オリエンテーションで高齢者医療の講義を開始し、さらに地域医療教育に協力いただいている施設のスタッフに参画いただき研修会を開催した。

また、医行為の実施率向上について議論を行った。

⑪ 地域医療実習充実のためのFDの開催。

地域医療教育に協力いただいている施設のスタッフに参画いただき地域医療実習報告会を開催した。

⑫ 臨床実習指導医認定制度運用開始。

現制度上でどのように位置づけるか検討を行った。

⑬ 診療科ごとに医行為の実施の割り振りを検討する。

シミュレータを貸出し、臨床実習の充実を図った。

また、各科に医行為実施可能性に関するアンケート調査を行った。

2026年度の医行為実施の向上に向けて各診療科ごとに相談し、割り振りを検討する。

⑭ 医行為実施の充実。

教育主任会議で、臨床実習全体の医行為実施に関する報告を行い、引き続き医行為実施指導について依頼を行った。

⑮ ICTや医療DXの活用による業務の効率化。

診療用Ubie生成AIを研究支援のために「治験環境用Ubie」として全国で初めて導入した。

これにより、文献検索、プロトコル作成支援、データ解析補助など、多岐にわたる研究活動の効率化を図った。

また、ARO の担当教員が、臨床試験学会にて、生成 AI 活用のワークショップにてファシリテータを勤め、院内でも前述したトライアルマネージャー会議にて生成 AI 利用のコツをフィードバックした。

その他、⑦⑧⑨を通して、業務の効率化を図っている。

- (*1) [九州大学病院 ARO 次世代医療センター](#)
- (*2) [卒前臨床実習生用オンライン臨床教育評価システム](#)
- (*3) [Moodle \(ムードル：本学で利用している e-learning システム\)](#)